

## 第10期県民生活審議会 第5回総合政策部会（概要）

- 1 日時 平成27年10月7日（水）14：00～16：00
- 2 場所 パレス神戸 中会議室
- 3 出席者 委員：鳥越会長、小西副会長兼部会長、木田委員、玉谷委員、野崎委員、服部委員、水田委員、森委員、山口委員、吉田委員  
県側：西上政策創生部長、東元県民生活局長、瀬上県民生活課長、久戸瀬協働推進室長、県民局・県民センターほか関係職員

### 4 内容

#### （1）政策創生部長挨拶

- 前回の部会でいただいたご意見を反映し、本日の資料は、かなり要点を取りまとめることができたと思う。
- 今後、地域創生に取り組むにあたり、ふるさとづくりは想いとしての1つの柱になる。
- 兵庫の多様性、大都市もあれば、地方都市、多自然地域も有することは、兵庫の強みでもあり、一方では、地域の多様性に応じた施策が必要だという課題でもある。
- そのような姿の中で、この提言が、今後も住みたい、住んで良かったという兵庫県になる1つのきっかけになればいいと思っている。
- 本日は最後の部会であるが、最終の取りまとめに向かって、忌憚のないご意見を賜るようお願い申し上げます。

#### （2）審議事項

##### （部会長）

本日は、最終提言案の審議となる。お示しした資料を修正していけるようなご意見をいただき、提言を取りまとめられるように審議していきたい。

##### （資料説明）

- 事務局から資料に基づき説明

#### （3）意見交換

##### 〈企業や仕事について〉

- 今ここで働く、仕事をしているというキーワードが出てこない。もっと「仕事」や「働く」というキーワードを入れるべきである。
- 提言の「生まれ育った場所」「今住んでいる場所」に「今職場のある場所」と加える。
- 企業には、地域に関わるビジネスや積極的に資金投入を望むようなアプローチをかけていくべきである。
- しごとや働くことは社会参加と考え、稼ぐしごとと、稼がないところ（山のしごと等）での生活の質を向上させるものがあるのではないか。
- 外から企業を呼び込んで地域の経済を守ることは配慮が必要。住民が主体となって誇れるものは何か、地域にとって本当に足りないものは何かを、自分たちがしっか

りと把握することが大切である。

- 企業の人材提供は、市民まつりなど年に1回だけというようなものが多い。定期的に派遣してもらえるような仕組みを考える必要がある。
- 職場を持っている人は、たとえ県外から通っていても自分のふるさとと思って働いて欲しい。

#### 〈祭りやイベントについて〉

- ふるさとの自然や歴史、伝統文化や祭りなどは、お年寄りも馴染んでいるが、若い人やIターンの方はピンとこないのではないか。
- 祭りなど、古いものばかりを例示するのではなく、今は「〇〇甲子園」という形で新しいことをたくさんしており、高校生等が参加できたり、課題テーマと自分が近づき合うような機会が作られているので、そういったものを前に出した方がいいのではないか。
- 祭りなど地域の人たちが誇りに思うものに若者が参加すると刺激になる。
- 地域の人たちが迎える力をつけるためには、自慢できるものがなければならない。自慢することで、若い人たちがそこに反応する。古いかもしれないが、それは祭りではないかと思う。

#### 〈人口の流動性について〉

- 人口減少・高齢化の一方で人口自体が流動化しており、動いていることが「ふるさと」とどう向き合うのかという事をもっと書き込んであるべき。
- 夜間人口でその地域をつくるのではなく、交流人口も含めて考える。
- 移住しなくても通ってもいい。
- 職場から住まいが離れたところにあっても、旅行で訪れても、場所に縛られないで、違う結びつきや関わり、違う絆でふるさとに拠り所を持ってもらいたい。
- そこで何らかのアクションをしてくれる人は、全てふるさとに関わっている人として抱え込む。

#### 〈若者について〉

- 田舎の課題は高齢化だが、成功している地域は、若い人たちを巻き込みながら、高齢者が生き生きと暮らしている。
- 社会人になりたての若者は、大学生の気分や、部活動の盛り上がり方をとても懐かしく、素に戻れる、はしゃげる場所が欲しいと思っている。
- 20代の若者を地域づくりの団体に取り込んではどうか。稼がないけど、心の拠り所となるような場所をつくる。そのためには、その人たちをどうやって捉えるかが課題である。

#### 〈三世代のつながりについて〉

- 三世代のつながりの真ん中に福祉を置いてはどうか。

- 三世代近居は、地域限定社員、転勤のない社員を選ぶことを指図している気もする。それよりも、血縁のない三世代がうまく交流したり、力を合わせて助け合う社会をつくろうということが大事である。

#### 〈実践活動の発表の場について〉

- 実践発表等は県内だけではなく、東京などでもプレス発表して実施する。さらに、国内に限らず海外にも発信すればいい。
- 地域づくり団体の発表の場を、他の地域の手法を参考にしたいと、去年から、広く地域外からも募集した。自分たちの地域だけでは視野が狭くなる。こういったものを全県版でしたらどうか。
- 関西広域連合などの範囲で、兵庫県が働きかけて、ふるさと自慢の場をつくったらどうか。
- 発表の場を作っても足を運んでもらわないと意味が無い。来場した人が気づきを持ち、次に活動のきっかけをつかんでもらう。いろいろな活動に触れる機会が必要である。
- 県下の素晴らしい企業が、東京事務所を作ることによって、全国版の企業になっているところがある。ふるさとづくりもそのアプローチで発信し、他都道府県の県民や自治体職員のために地域作りノウハウフォーラムなどをしてはどうか。

#### 〈情報発信について〉

- 情報を電子化して、例えば三世代交流で検索したら事例が出てくるなどの対応をしないと、情報が使いにくい。
- 県内で情報発信をするだけでは意味がなく、発信方法を考える岐路に来ている。行政のコーディネーター機能に加えて、情報提供発信機能の検討とバージョンアップと明記していただきたい。
- 情報発信はしているが共通の資源として活用されていない。行政がすべき第一のことは、資源の活用を活性化させること。
- （他の委員意見を聞いて）情報が来ていないことを実感している。
- わくわくオーケストラなど県の事業だということを知られていない。市などの事業だと思われていて、県のPR不足を感じる。いい取り組みがたくさんあるのに、県の顔が見えてこない。
- 県民に発信すると共に日本全体や海外にも発信するとマスコミが報道してくれ、逆に全国ニュースとして県民が知る。

#### 〈県のコーディネーター機能について〉

- コーディネーター機能を担うのが行政だと県民は敷居が高く感じる。ふるさとコンシェルジュのような、コーディネーターとのパイプになる、ワンストップで教えてもらえるような敷居の低いところが欲しい。
- コーディネーター機能を行政が担うなら、途中で消えてしまう形ではなく、つきつめたところまで教えてもらえるようにして欲しい。

○行政と住民の活動をつなぐ窓口として、中間支援のNPOがあることを、提言に打ち出してほしい。

### 〈提言のまとめ方（視点）〉

- 弱者の人の視点が足りない。高齢化が進んでいく中で福祉の視点は絶対外せない。
- 今回は弱者の視点を明記しなくても、包摂力などの言葉に含まれることになるのではないか。
- ふるさとで変わらないものと変わるものが、どうお互いに支え合って新しい21世紀型のふるさとをつくっていくか、という視点を入れる必要がある。
- 兵庫県が何を大事にしているかを打ち出すことが大切である。
- きれいにまとめているがワクワク感がない。
- 自分の生活スタイルに合ったところを選べるようにすることが必要である。
- これだけは守らなければならないルールをはっきりさせる必要がある。
- 若者や外から来た人を迎える力、開いた地域であることを魅力に持つとか、包摂やだき抱える力が前面に来ないと全体がまとまらない。多様な価値観・地域を超えた連携は開かれた地域でこそできる。
- 「人と人のつながりを豊かにする」は1つにまとまらないか。バラバラで地域の中で何も見えてこないのが現状。新たな書き方をしないと、今までと変わらない。
- 全体を読むとつかめない。フックになるもの、ひっかけるもの、縛るものがない。
- 構造的に横ぐしがいるのではないか。情報とか連携という、活性化の中の共通項目として出てくるような。
- 知らせる力とか知る力、迎える力はどうか
- 地域創生戦略と連携していくような、結びつけていく形にできないのか。
- 地域創生戦略には「個性あふれるふるさと兵庫をつくる」という柱を立てている。県民意識を高める項目で、今回の提言はそこに施策として組み込もうと考えている。  
(事務局)

### 〈提言のまとめ方（前向きな表現）〉

- 課題や、こうあって欲しいとの希望が書かれているが、前向き論がない。
- 後ろ向きな話ばかりの印象がある。もう少しパンチをきかせた方がいい。
- 全体として前向きな発想にすることを意識すべき
- 最初に「兵庫県はここを目指します、それはこのような課題があって乗り越えたいからです」という書き方をすればいいのではないか。そうしないと最後まで読んでもらえない。
- こういうことをやっているんですよ、という「自慢路線」の書き方をする。
- わくわくするような自慢できる事例を2つ3つ入れてはどうか。その後で言葉をまとめると、すべきことが見えそうな気がする。
- 県民交流広場やトライやる・ウィークなど、兵庫県には、自慢できるものが他府県に比べて多い。
- 阪神・淡路大震災を経験した兵庫県だからこそできた仕組みは、東日本大震災でも

注目された。兵庫にしかできないもの、兵庫で生まれた仕組みはいっぱいある。

#### 〈提言のまとめ方（キーワード）〉

- 全体をまとめあげる、魅力的なキーワードがない。
- 趣旨か展望でキーワードがいる。ふるさとづくりの基本はこうだというものが欲しい。
- 包摂力が使えるのではないか。県が今まで蓄積してきたものは、一言で言えば包摂力である。
- キャッチフレーズは単に並べるだけでなく、自慢できるようなものがある。
- 包み込む力
- 迎える力。いろいろなものを迎え、つつみ込む兵庫県。包容力。母なる兵庫
- 迎える力、つつみ込む力を並列してアピールしてもいい。
- 包摂はいいと思うが、こだわる必要はない。すべてを受け入れる、温かさを売りにしていることをうまく示せる言葉であれば。似た言葉は抱擁である。

#### （４）県民生活局長挨拶

- 本日は、熱心にご審議いただき、お礼申し上げます。
- 最後の総合政策部会だったが、本日の議論は非常に前向きで明るいものだったと思っている。
- この提言を受け止めさせていただき、地域創生の具体的な施策の中でどう生かしていくかを、これからしっかりと考えていきたい。
- キーワードを考えるということで、最終提言までもう少し頑張らせていただくので、引き続き、ご指導をお願い申し上げます。